逃げる神様（一幕）

三好十郎

インチキ宗教の祭壇のある部室。末尾の作者の附記にもある通り、集会などで素人の手によつても手軽に上演されるように書かれてある脚本。従つて広い家なら座敷を打ち抜いて一方の室部で演じるのを、こちら側から楽しく見るということも可能である。只、此の劇の装置上の設定として、祭壇の位置と二ヵ所の出入口の相対関係が、人物の動きに対して大切な要素となつているので、演出プランによつてよく動きが計算された上で、装置プランも決定されなければならない。この劇はインチキ宗教に対する痛烈な諷刺喜劇であるから、出来るならば、この部室は簡素なたゝずまいのなかにも、堂々たる森厳さを出した方がよい。そうすることによつて、外面のコケおどかしな荘重さのなかに演じられる諸々のインチキな形相が、より判然とコントラストされて効果が強まると思う。また喜劇であるからといつてあまり様式化されぬ方が良い。

ドラとシチリキが一緒になった様な物々しい音が、ヂヤーン、ピヤーピヤーと三度ばかり鳴り、それにつれて四五の人間が熱狂的な読経をはじめる。香の匂ひ。

開幕。

ガランとした荘重森厳な広間。柱など白木造り。しかし家具調度といつては一つも無く、僅かに左手に白木の祭壇があり、その前に普通の約二倍もの大きさの燃えるような緋色の座蒲団が一つ。祭壇上には中央、眼の高さに古代鏡が一つ据えられ、その前に飾りの美しい剣が一振置いてあるだけ。祭壇の前に菓子や果物の供物。

夜中だが、室内は大変明るい。

中央辺に、祭壇の方を向いて坐り、経（観音経のしまひの部分）を朗々と合唱している三人

総務と執行と執筆（これは一人だけ若い女）。三人とも普通の着物の上に白衣。読経が終る。

間。

総務　（左右に塩を撒きちらすような手附きを五六度した後）……只今、おかみは御接神がおすみになるから、直ぐにさがつて、先程申しつけた順で、一人づゝ。

執行　はい。

総務　いつもの通り、長廊下の入口まで案内すればよい。暗いから、一々手を取つてあげるように。拝殿へは私が行く。タミ。

執事　はい。

総務　もつとシッカリ握つてあげないかん。わかるか？

執行　……はい。

執行と執事立つて右手へ行きかける。そこへ、正面の襖が開いて、長髪、白衣、白袴の青年帆立が、傍眼もしないでスーツと歩いて来る。行きかけた執行と執事はそれを見て再び坐り、畳に吸ひ付くように頭を下げる。総務も同様。帆立は不機嫌なシカメ顔に、物につかれた様な眼付きを動かさず、三人を無視して、緋の座蒲団に、祭壇に向つて坐る。したがつて三人には背を向ける。後で信者達と応対するのもズット背を向けている。

総務　（頭を上げて）よろしい、行きなさい。

執行と執事立つて右手へ。

帆立　……タミ。

執事　はい。

帆立　……ウズ彦は？

執事　ご機嫌でございます。

帆立　まだ起きているのか？

執事　御元気でございます。

帆立　……これを持つて行つてやるように。（供物鉢の一つを持ち上げる）

総務　それは後で。（執行と執事に顎で行けと命じる。黙つて右手へ二人去る）

帆立　しかし、まだ寝ないと言ふのは、腹を空かしているのだ。

総務　あとで、よろし。……では、順序と一人々々に就ては先程申し上げた通り。尚、念のため、これを。（と懐中から紙片を出して、祭壇の上、帆立の眼の下に置く）言う事は先方で皆言つてくれるので、あなたは一言か二言、いつもの通りに。よろしいな？

帆立　……よろしい、よろしい。

総務　では私は拝殿の方へ参つて、トキアカシを致しますから、御用の際は、三鈴（れい）して下さるように。（辞儀をして左手の方へ去る）

帆立は静座して、半眼を開いて紙片を見詰めてゐる。静かである。これから何が始まるのか、まるきり見当が付かない。――間

右手入口から黒い立派な和服、袴姿の中老の男が小腰をかゞめて入つて来る。暗い所から急に出て来たらしく、まぶしくて眼がくらむのか少しヒョタヒョタした後、すり足で入つて来て、右寄り、帆立の背を見て坐つて、ていねいに身体を伏せる。

男一　……此の前は、どうも、いろ〳〵と。

帆立　……（低く唸つている）

男一　実は、あゝは言われても、半信半疑で会つて見ましたが、いろ〳〵と追い詰め、追い廻したあげく、やつとサラケ出させた先方の腹と言うのが、御言葉の通りでございまして。驚ろきました。いやあ、世間がこんな事になつて来ますと、四の五のと言つたところで、しかも、幹部級で候でいても、なんと言う事はありません。ハハハ。結局、実力の在る所へ、実権も集ります。

帆立　……瀬ノ尾さんか。

男一　はあ、どうもありがとう存じました。全く、要するに金ですなあ。刀では殺せない奴も金では殺せる。いづれにしろ、金属に縁のある所へ、すべてが舞い戻つて来ます。さすが弁町会の連中が、御言葉通りに言つたら、青くなりましてね。黙つていますから、私が「神戸へんの金塊の相場は今、いくらでしたつけ？」と一言言つたら、先方で何を言うかと思うと「これはどうか此処だけの話にして貰いたい、事実無根だ」そいで私が「事実無根

結構です」と言いましたら「その代り今度の物入りには、三つだけ出させる」と言います。「勿論、マルは六つ附くんでしような？」「御念には及びません。はゞかりながら、弁町会ですよ」てな事で、あとは笑い話になつてしまいました。アッハハハ、それにしても、どこでそれを聞いた、早聞と言つても少し早過ぎる、まさか――と尋ねますからね、私にや神様が附いているから――。

帆立　……あ！　うん！（相手を無視して唸る）

男一　誰だ？　と聞くんで、「事実無根だつた筈ですな」と逆襲したら、「瀬ノ尾さんにはかなわん！」笑つて戻つて来ましたが、うつかり嗅ぎ出されちや、此方がたまりませんからね。いや、ありがとう存じました。おかげで、芝居が少し面白くなります。

帆立　邪魔だ。

男一　へ？……はい？

帆立　邪魔だつ！（怒鳴る）

男一　（少しキョトキョトして、急に畏怖に襲われた顔をし、畳に両手を突いて、帆立の言う事から何かの意味を引き出そうとして帆立の背を注視する）……邪魔？……えゝと、すると言うと――？

帆立　そちらで考える。

男一　……実は今日参つたのが、つまりその金を誰に渡したものかと、伺いに出たわけでして。

いづれ寄附と言う事になりましようが、どつちせ、公表出来る筋合いのものではありませんで、従つて橋を渡してやつた私のカヂの取りよう一つで、どうにも出来ます。安藤の手に入れるか中山の手に渡すか？　会長と言い幹事長と言つたところで、つゞまる所、それは名前だけのものでしてな、金を摑んだ奴が実権を握ります。従つてそ奴がうちの頭数二十いくつを支配します。二十いくつと言う数は僅かですがな、御存じの様に、此の十二月には、その二十いくつと言う頭数が物を言つてキャスティング・ヴォートを握ることに必ずなりますで、従つてうちの実権を握る奴が、即ち一言に申せば天下を握ることに必ずなります。いかゞでしようか安藤と中山、どちらに渡せば？

帆立　えいつ！……ムー。えいつ！

男一　……はい。どうもね、この様に世間が不安な状態で方向を失つている有様では、黒幕黒幕と言われて種々仂いていても、そうゾンキな事はやれませんでなあ。確信有る者がダンコたる確信を実行せな、なりません。国家の為めにですなあ。……どうでしようか、安藤と中山、どちらが？

帆立　邪魔だつ！

男一　邪魔？（意味を考えている）……えゝと、安藤ですか、中山ですか？　順から言えば何と言つても会長ですから安藤ですが、中山にすれば――

帆立　それが、邪魔だつ！

男一　あゝ！　そうですか！　なるほどねえ。フーン。……いや、尙よく総務さんにとき、あかし、をしていたゞきましよう。わかりました。ありがとう存じます。では、これで。（ひれ伏さんばかりに礼をして立ち上りかける）

帆立　それで、あんたは？

男一　いやあ、アッハハハ、私あ走り使いですよ。たゞ私の信念に依つて、現下百般の風潮に多少でも安定を与えることが出来れば、他に望みはありません。まあ強いて言えば、実権を握る者のキンダマを摑んでいる人間が、実はホントの実権を握つている者だとでも思つて自ら慰めますかな。いや、策士などゝ言うものは、いつも損な役です。

帆立　三つと言うのは嘘だ。五つだろう。その中の二つは、あんたの手に入る。

男一　ま、ま、ま、そこまで言えば、キリがありません。アハハハ、いや、では、これで。（再び丁寧に頭を下げて立ち、去る。去りながらチョット立止り、考え、チラッと振返つて帆立の方を、おびえた眼で見た後、首をひねりながら、右手へ去る）

帆立は默つて坐つている。

男二――四十歳前後、和服袴姿――が右手から入つて来る。目がくらんでキョロキョロするのは同様だが、これは男一よりも畏怖していて、坐るまでに三つも四つも辞儀をする。ペタッと、ひれ伏す。

男二　……黒沢でございます。

帆立　（いきなり）要するに金だ！　金をつかんだ奴が実権をにぎる。そのまたキンダマをつかんでいる奴がホントの実権をにぎるぞ！

男二　は？……（考へていたが突然何かに思い当つて、電気をかけられた様に飛び上る）へーつ！　恐れ入りました！　左様でございます。どうしても此の際、受けなければならん手筋が二口出来て居ります。人絹と鉄ですけれど、いづれも、近頃の雲行きでは、間際でどうドデンを打つか解らんので、実はどつちにしたものかと迷い抜いて居るんですがね。どつちかに決めさえすればいづれ押せば押せるシロモノなので、自信は無くもありませんが、手口が大きいだけに迷います。十五年間、株で飯を食つている奴が、シダラの無いていたらくですが、どうも近頃の景気の動きと言うものが、どの辺がシンになるものか訳がわからなくなつて来ましてな。かと言つて、今更、ケイ線と首つぴきの鞘稼ぎも出来ないと言う――

帆立　刀では殺せずとも、金では殺せる！

男二　へえ？……ピッタリとおつしやつて下さい。たつた一言で結構で。人絹に乗つた方がいいか、鉄に乗るか？

帆立　えいつ！……ウム（唸る）

男二　実は相手方を店に待たしてありますんで。たつた一言、たつた一言でスパッと仰せ下されば、それで――

帆立　いづれにしろ、金属に縁のある所へ、すべてが舞い戻つて来る。

男二　へ？……て、鉄だつ！　へい！　ありがとうござ――いづれ又直ぐに、――では――（二三度畳に額をこすりつけて、ソソクサ走るようにして右手へ去る）

入れ違いに女一――黒づくめの贅沢ななりで美しい三十女――が入つて来て、坐つて頭を下げるや、いきなりベラベラとはじめる。

女一　いえね、なにしろ相手が左翼くづれの赤新聞の社長とか主筆とか、なんだか知りませんけれど、ひとひねりも、ふたひねりもひねつた男なんですから、袖にすれば、どんな事をはじめるかわからないもんですから、少し怖わかつたんですの。そいでも先生のおつしやつた通りに申しましたら、はじめシヨゲてジロ〳〵見ていましたが、「そいで、やれるものならやつて見ろ。へりくつを並べたつて事は尻を割つてらあ。要するに馬を牛に乗りかえ新宿の目抜きへ店を出して貰うコンタンだろうが」そりやあね、そう言つちまへば、実もフタもありませんが、なんてつたつて、おアシにならなきあ仕方がありませんもの、先方の言ふのが無理なんです。女三十で二人もの子持ちとなれば、あんな場末の

バーのマダムで腐つてしまうか、たとへ都会議員の第二号が三号になつても、一流の店でパリ〳〵やれるかの境目に立てば、少しは考える道理ざいましよう？

帆立　裸かになつて来い。

女一　……？　いえ、正直の事を申してるんざいますの。もともと好きで一緒になつた仲なんですから、行末の見込みさえ有れば誰が斎藤と別れるもんですか。現に二番目の保男は斎藤の子――

帆立　なのか？

女一　だらう、と思つて居るんですの。似て居りますから。

帆立　では別れなければよい。

女一　まあ先生、そこをお伺いしているんぢやありませんの、お人の悪い！　ですからさ、気が迷つて、どうにも考えが付かないで――

帆立　裸かになる。

女一　ですから、私以上に裸かになつて、世間と闘つている女は他にいやしません。

帆立　今、裸かになれ。

女一　……？此処で裸かになるんですの？

帆立　その場で裸かになれ。即座に！　直下に！　裸かつ！　裸かつ！　裸かになれ！

女一　……？　へえ。なれとおつしやれば、なりますけど、なんだか。……いえ、なりますわ

帯を解きはじめる。それでも少しためらつている。

帆立　ようし！　早く！　迷いを斬つてやる！（壇上の剣を、坐つたまゝでスラリと抜き、立ち上りかける）

女一　あ！　（あわてゝ、帯を解く。長襦袢の紅い物がチラチラ見える）

帆立　えいつ！

右手から総務が入つて来る。此の場の光景を見てギョッと立ちすくむ。

女一　あらつ！　しやがんでしまう

総務　いやあ。……よろしい。（不得要領に言つて、女と帆立を見くらべている。帆立は抜身をすかすようにして見ている）

女一　（手早く着物をつくろつて）ごめん遊ばせ。（コソコソ去る）

総務　（それを見送つていたが、ニヤ〳〵して）……いけませんよ。

帆立　ふん（これも少しテレて笑つている）

総務　あなたは神様ですよ。忘れてはいけません。

帆立　……神様なんかぢや無いさ。

総務　又、発作を起しましたな。神様ですよ。

帆立　違う！　僕は人間だ。

総務　では、その透視力は何です？

帆立　透視の能力は有る。透視や暗示力と言うのは、精神統一を三四年も練習すれば大概の人に出来る。しかし此処では、その透視力も要りはしないのだ。向うから何もかも言つてくれるんだからな。

総務　それでよいのです。神様と言うのは人間がこしらえるもんです。

帆立　相手は木の根つこでもいいと言うんだろ？

総務　さよう、えゝ訳だ。世間にそんな需要が有る。需要が有れば、供給せなりませんわ。私等がやらなければ、他の神様の所へ行くだろう。世間が一帯にそうなつて来て居る。神様ができたから迷信が生れるんでは無い。人の心に迷いが有るから神様が生れる。シタヂは世間の人達の中に有る。既に迷いが有るからには、それをサイドしてやるのが立派なクドクだ。

帆立　ぢや、ウズ彦でもいゝ訳だ。

総務　さようさ。

帆立　（抜身をカラリと投げ出して）インチキだ。

総務　インチキと言えば、此処にやつて来る人だつて、みーんなインチキだ。
帆立　そらそうだ。
総務　だから、えゝか、この点を考えな、いきませんぞ。それで動いてるのが生きた世間だと言う事ぢや。インチキは馬鹿に出来ても世間は馬鹿に出来まい？
帆立　いゝよ、わかつた、わかつた。
総務　あんたは、神様だ。
帆立　神様だ。クフン。
総務　では、あと六人居りますで、直ぐ続けます。（立つ）
帆立　よろしい、来い！　ブルル！　えいつ！　ところで、ウズ彦なあ？
総務　どうしてあんたは、あれの事ばかり気にするかの？
帆立　どうして？　僕にもわからん。馬鹿に可愛いゝのだ。多分、僕の事を人間扱いにしてくれるのが、あれだけだからだろ。
総務　とにかく、すつかりすましてしまつてから菓子でも果物でも好きなだけやつたらえゝ。
帆立　だが捨てとくと、又、此処へ来る。
総務　大丈夫、大丈夫。えゝと、次は――（と言つている所へ、ドッシリした洋服の紳士が右手からペコ〳〵して入つて来る）あゝ、白林さん、いかがですかな、芝居の方の景気は？

後の部分は帆立に聞かせている。

男三　はい、いや、実はその事に就てですがな、少しお伺いを立てたいと存じて、実はなんで来月の二の替りの出し物に就き、チト……。

総務　いや、それを私に言うたら、あかん。おかみへ、先づ。（帆立の方へ一度礼をして立去る。男三はへいつくばる）（帆立は前の通り祭壇に向つて静座している）

男三　実は何でございます。二の替りの世界定めの件に就てどうしても一存に余りましてな、それも一番目、中幕は、これはまあ大体おさまつたんですが、問題は二番目物で。いえ出し物はいくらでもございます。大体が近頃のお客は芝居を見に来るんぢやありません、見合いにやつて来るとか、宴会に来るとか、せい〳〵役者を見に来るのが上の部で。もつとも、私の方としましては場代さえ頂戴すれば余の事はどうでもよろしい次第で、ですから出し物は何でもよろしい。たゞ御存じの通り、ウチには立役としまして目下、ダカムラ屋のヒノシ屋が居りますが、二番目のトリをどちらに出させるか、この事でございますよ。へへへ、どうもね、実は正直に申し上げてしまいますが、これは昨日コンコン様の方にもお伺いを立てゝ見ましたが、ダカムラの方からもヒノシの方からもチャンとつけとゞけが有つたと見えて、どうにもハッキリした御神宣がありません。それで――

帆立　それは、いかん。

男三　へ？

帆立　世間にそんな需要が有る。需要が有れば供給せな、いけないわけだ。

男三　すると言いますと、ダカムラ屋の方にしますか、それともヒノシ屋の――？

帆立　迷うからいかん。迷うから、インチキに引つかゝる。私は神だ。

男三　へ――つ！（ちゞみ上つて突伏す）

帆立　わかつたら、お帰り。

男三　（キョトンとしていたが）へい、いえ、その、すると申しますと、どちらに！　いえ、実は、近頃、ほかの仕打ちで、この、いろ〳〵役者の引つこ抜きと言う事をやりよりましてな。此の際、ダカムラとヒノシのどちらに二番を向けても、はづされた方がどうせ曲ります。役者なぞと言う者は、いづれは馬鹿でがして、曲つたトタンに、引つこ抜きの手が来れば――

帆立　金か？

男三　へえ、いづれ、それですがね、それを私は心配しているのですよ。で、ヒノシとダカムラの、いづれに――？

帆立　よろしい。ひとことだけ言う。あとはそちらで考える。……えいつ！　ウーム。

男三　ありがとう存じます。

帆立　ウーム！　立つた、立つてごらん！
男三　立つんで？（立つ）
帆立　えいつ！　えい！……あんたシャチホコ立ちは出来るか？
男　へつ?!　シャチホコ立ち……えゝと――
帆立　出来る！　やつて見る！　立つて見ろつ！
男三　でも、どうも、まさか、その――
帆立　直下にやれえつ！　え、やつ！

男三シャチホコ立ちをする。キュッキュッと変な声を出しながら。

帆立　それで、歩き廻る！　ウーム！

男三両手で歩き廻つた末、ドタンとデングリ返る。

男三　（眼をまわしてフーフー言いながら）キュッ！　ど、どうも血圧が……
帆立　金属に縁の有るものに、すべてが集まるぞ！
男三　はい？……金属？　金ですな？　すると、ヒノシとダカムラ――、ヒノシと、ぢや、ヒノ

シ屋でございますな。わかりました。キュッ。

帆立　よろしい、退る。

男三ペタンと辞儀をしてから、フラフラ腰で立ち上り、キュッと言いながら、右手へ去る。帆立、仰向けに寝転ぶ。しばらく天井を見ていた後、クルリと起き直つて、シャチホコ立ちを試みる。ちよつとして、直ぐ倒れる。

帆立　（倒れたまゝで）キュッ。……豚め！神よ助けたまへ。……そうぢや無いや、神様あ俺だ。（次第にゲラゲラ笑いはじめる）

堂々たる洋服姿の男四、右手から入つて来る。帆立が仰向けに寝たまゝ笑つているのでめんくらつて、どうしてよいか解らずマゴマゴしている。

帆立　榊原五兵衛。双葉屋の大番頭。臼田銀行の頭取で、こないだ弁町会に六ツだけ出さゝれた。フフフ、堂々めぐりだな。チャンと書いてある、チャンと書いてある。ハハハ。

男四　へーつ。（坐つて、へいつくばる）書いてございますと申しますと？

帆立　ヘッヘヘヘヘ、（祭壇の紙片を指して）あれに書いてある。（ゲラゲラ笑いつゞける）

男四　（古代鏡だと思つて）へーつ、恐れ入れました。実はそれに就てゞございますがな、相手がどうも当時一番強気な方面のバックが有るそうで、当方ではお客様相手の弱い商売をやつて居りませば、何となくカランで来られると突つぱねる訳にも行きませんで、ま、そんな事になりましたが、これが又々後を引くことになれば、いくらなんでも困りますわけで、それには何とかして別の勢力に結び付いてですな、そちらの圧力で防ぎを付けるより他に方法はありません。それで、種々あたつて見ましたが――

帆立　（ズッと仰向けになつたまゝゲラゲラ笑つている）立憲北斗会の瀬ノ尾正治の所へ行く。

男四　瀬ノ尾正治？

帆立　トキアカシを受ける。弁町会がこれこれだと、瀬ノ尾に会つたら正直に言う。ハハハハ、へへへ。

男四　はい、それは申されるまでも無く……へい？　すると何でございますか、しかしやつぱり、それにしても、献金……とか寄附は？　勿論北斗会の方へでございますな？　なるほど！　フーム。はい？　は？　なるほど！（と、相手の帆立はクスクス笑つているばかりで何の表示もしないのに、自分一人で問うたり考えたり、合点したりしている）

帆立　帰れ。フッフフフフフ、帰れ。

男四　はい。……ではもう一つだけ、お伺いを。この前にもチョット申し上げましたが、越前屋デパートから申込んで来て居る合併の件でございますな。これが業務調査その他一切完

了しまして、合併すれば直ぐにも出来るような状態にはなつて居りますが、私の方の大株主の一人で、どうも乾（いぬゐ）では方角が悪いと言う者が居りまして、何でも暗剣殺は少しはづれるそうですが、なんせ、良く無い。但し、今月にいたしますと星廻りは至つてよろしいそうで。これをいかゞ――

帆立　ヒッ！　（笑つていたが、やがて不意に叫び声をあげて立上つて、手足を空中に妙な格好で突き出し、身体を痙攣させて、一種の踊りのような事をする。シミー・ダンスに似ている。びつくりして畳にへばり付いている男四）神が飢えるぞつ！　ウッ！

男四　（ガタガタ顫えながら）合併いたしましようでございましようか？　それともいたさぬ方がよろしいのでござ――？

帆立　（絶望的な声を振りしぼる）神が飢える！　帰れ、帰れ、帰れ！　ウッ、合併しろ、合併してしまえつ！　ウズ彦が飢える！　ブルルル、ヒーッ！

男四　へーつ！（畏怖に満ちた顔で三拝九拝して、あわてゝひきさがつて行く）

帆立はしばらくシミー・ダンスをつゞける。……やがてフッとそれをやめて、立つたまゝ狐つきから狐が落ちた様にケロッとした顔で四辺を見廻し、誰も居ないのを見て、奥の間へ行こうとして、ソロソロ正面の襖の方へ歩きかける。

右手から人の来る足音。

それを耳に入れて、仕方なく奥へ行くのをよして、振返る帆立。右手から黒紋服に袴の三十七八の男五が出て来る。

帆立　……？（相手の様子が、いつも此処にやつて来る人間達の態度とは少し変つているので妙な顔をして見る）

男五　……（室の中をズーッと見廻し、天井の方まで見終つた末）やあ、はじめまして。神様は、あんたですか？　えゝと、（見廻しても座蒲団は一つしか無いので、緋の座蒲団の所へ行き、それをチョッと引張り出して、坐る）……まあ、お坐んなさい。

帆立　……（こんな目には初めてあうので、非常にめんくらつて、呆然と相手を見詰めている。やつと畳の上に坐る……）

男五　私は初めて此処にやつて来たのであるが、思つたよりも大変なもので、驚ろきましたなあ。アハハハ、株屋だとか有閑マダムなんどは、まだ解るとしてもだな、北斗会の瀬ノ尾や臼田の榊原などまでが、こんな所へやつて来ると言うのは、意外でもあれば、心外でもある。仮りにも政界と経済界に於ける一方の重鎮がさ。これを以てしても現代社会に於ける信念の欠除と不安の風潮の甚だしさが解ります。要するに不安なんだな。何かに頼りたい、が、何も無い、それでウロウロ迷つているのが、迷い迷つて、不安の嵐に追いまくられて、こんな吹きだまりに寄つて来る。

帆立　吹きだまり……（相手の喋りまくるのを見ている）

男五　溺れる者は藁をも摑む、です。その、これは藁しべだ。

帆立　藁しべ……

男五社　社会にそんな需要が有る。需要が有れば誰れかが供給せねばならん道理だ。世の中が別のものにならん限り、無くなりはしない。その物自体は、鰯の頭でも、木の根つこでもよいわけだ。要するに神と言うものは人間が拵えるんだからな。

帆立　人間がね……（あべこべの事を言われて、非常にヘコタレている）

男五　噂さに聞くと、あんたは奇蹟を行うそうだが、それを是非見せて欲しいな。私は自分の眼で見、耳で聞かぬ内は信じない性分でしてなあ。奇蹟を行つて見せて下さい。うん？見せて下さい。（泣きべそをかき、ペコペコしている帆立）……見せて下されば、私も信者の一人になりましょう。どうだ？　私は――申し遅れたが、私は笹山と言う者です。妙法一霊会、行動隊々長、笹山日堂。さ、見せていたゞきたい。うん？

帆立　どうも、奇蹟などゝ言う――

男五　（怒鳴る）裸かになれつ！　裸かになれつ！裸かつ！（驚いて飛び上る帆立）アッハハハハ、もうよい。そんな事だろうと思いましたよ。では失礼。料金はいくらですかな？いえさ、出すべきものはチャンと私は出すと言う主義だ。いくらですか？

帆立　へい？

男五　料金々々。――一人いくら？さあ――

帆立　そんなものは、いたゞいて居りません。

男五　冗談を言つてはいかん。金を取らないで、第一、これだけの堂々たる設備がどうして出来る？

帆立　寄附だそうです。私は、よく知らん。

男五　ふーん。よかろう。それもよし、と。（祭壇の上の剣に目を付け）立派な刀（とう）が有るなあ。どれ、ふーん（取つて見ていたが、いきなり居合ひの型で抜く）えいつ？　おおつ？　ウム？　ウ！　とう！　やつ！　えいつ！（ピュッピュッと振り廻す。刀の先が帆立の鼻の先まで延びて来るので、帆立その度に飛び退き、その辺をおどり廻る）ウムッ！　ウ！　とう！（やめて、刄を見ながら）新刀だな、備前物の末流か。ハハ、銘は見ないでも解つている。（鞘に納めて祭壇の上に置きながら）作りだけ綺麗なコケオドシの刀が近頃多い。人を斬るために打つた物で無い奴は、抜いて見たばかりで殺気が無いから、駄目だ。（祭壇の上の紙片に眼をつける）刀は人を斬る道具なんだからな、アハハハ。

帆立は、相手が紙片に気を取られている隙に逃げ出そうと思つて坐つたまゝでジリジリ後しざりをしている。ビッショリ冷汗をかいている。

男五　（不意に笑いを止めて、顔色を変えている）せ、瀬ノ尾、弁町会より五百万？　こ、これは何だ？　五百万？　これは何です？

帆立　そ、そ、それが、安藤の手に入る、安藤の手に入る、ようにした。

男五　した？　安藤の手に？　した、とは誰がしたんだ？

帆立　わ、私がした。私がそう言つてやつて――。

男五　ウーム。嘘だろう？……ほ、本当に？

帆立　せ、瀬ノ尾に、私がそう言つて――。

男五　……そうか、ようし？　嘘ではあるまいなあ？（默つてコックリをする帆立）……それで解つた！　中山がなぜに瀬ノ尾の方へお百度を踏むか、今の今日まで解せなかつたのだ。ありがたい！　ようし、こいつは、うまい！（ビシャリと膝を叩いて、あわてゝ立上り小走りに行きかけるが、足を止めて）……瀬ノ尾は、あんたの言う事は聞きますね？

帆立　こ、これまで、何でも聞いた。

男五　偉い！（帆立をヂロヂロ見ていたが）あんたは、やっぱり神様だ。では、いづれ又！（いきなり膝を突いて、今迄の誰がしたよりも丁寧な辞儀を四つ五つ続けざまにしてから、アタフタと右手へ消える）

ゲンナリして坐つている帆立。

これまで人々の出入りした所とは少し違う右手の襖が、ソーッと開く。開いたまゝで暫くは誰も出て来ないが、やがて人の足の先が現われ、手が現われて、抜き足をして廊下に出てきたのはあやしげな頬被りの男六。きたならしいオーバオールの上に背広の上着を着て、左手には恐ろしく大きなドタ靴一足をさげ、右手にはスパナーを握りしめている。その手がブルブル顫えている。抜き足で廊下を此方へ――。

帆立は人の来た気配に眼が醒めたようになり、座蒲団の上に祭壇に向いて坐り直し、あわてゝ紙片の字を默読する。次に来る筈の信者に関する條を読んでいるのである。読み終り、頭をブルブルと振り、眼をつぶつて静座する。

男六、抜き足で此の部屋に入つて来る。はじめ帆立の姿が眼に入らず、誰も居ないと思つて四五歩入つて来る。

帆立　えいつ！　ウッ！

男六、びつくりして飛び上る。やにわに逃げ出しかける。

帆立　又、病気が起つた！　まあ！　坐れつ！

男六、ペタンと坐つてしまい、ふるえる。

帆立　えつ！　慾が有る。自分の慾が内にこもつて病気になる。慾を捨てろ。

男六　へつ！

帆立　源五郎丸健作。用心しろよ！

男六　へ。源五郎丸健作？

帆立　白つぱくれてもいかん！　持つて居る物を捨てろ！　持物を捨てろ！

男六、ドタ靴とスパナーを見較べ、靴だけを下に置く。

帆立　近頃、あんたの工場では自動車の部分品を拵へて居る。それはよい。

男六　へい？

帆立　それはよいが、もうけかたが、ひどすぎる！

男六　いえ、私は――？

帆立　臨時工を本工になをして常雇給を出さなければならなくなると、首にする。先日も十人ばかり首を切つた。これも良くない！

男六　どうして、それを、御存じ――実はそれで私――

帆立　見通しだ！　みんな慾だ。捨てろ。でなければリューマチは又出るぞ。

男六　リュー？（ビクビクしながら、しきりと首をひねくり廻している）

帆立　捨てろつ！　捨てろつ！　捨てろつ！

男六　へ！　へ！

右奥から足音が近づく。男六それを聞きつけ、ギックリして立上り、ウロウロと逃げ口を捜すが見付からぬので、正面の襖の一番端を少し開け、そこへスッと隠れる。その際、窓の隅にドタ靴だけ置き忘れる。

右手から入れ違いに総務。

総務　ハハハ、いや、どうかな！　ハハ、いやあ、行動隊々長かなんか知らんが、いまどきの連中が、スのコンニャクのと言つて見たところで、要するに右も左も眞暗闇ぢやからなあ。あんなのが一番よい信者になる。結局、人間と人間は自分の利益で以てつながつているんぢやから、そこの急所を摑むが勝ちだ。利を以て誘えば金鉄もこれを――

帆立　あんたと僕も利でつながつているのか？

総務　う？　あんたと？　左様さ。ま、さうだな。

帆立　僕が自分の利益を捨てると言つたら？

総務　損をする。それだけの話。

帆立　損をしてもよい。僕はもう、いやだ。

総務　外は、失業地獄ぢや。あんたに何が出来るかいな？　まあ、ヒステリーは起さん方が身のためだ。

帆立　大道易者にでもなれます。

総務　それそれ、なるとなれば、それだろう？　易者にしたつて、結局、現在あんたのしているのと同じ事をするわな。同じ事さ。だろう？

帆立　神様にまつり上げられるよりはましですよ。

総務　易者にしても一種の神様さ。大きいか小さいかの違いだけだ。よかれ悪しかれズバッと言い切つて物を言う奴が神様になる。宗教と言うものは、みいーんな、それだ。迷信々々と一言に言うが、迷信で無い宗教なんぞ一つとして有る訳のものぢや無いて。それでよいのだ。現にこれで病気が癒つて居る。迷いが救われて居る。いろいろと人が助かつて居るのだ。

帆立　しかし、僕はもう、ごめんだ。チェッ――

総務　逃げ出すのか？　よかろう。そうなれば、又造ればよいのぢや。もうこうなれば御本尊は何でもよい。ひとつ、ウズ彦でも据えるか。

帆立　えゝ、と、ウズ彦はどうしました？

総務　裏で走り廻つとるぢやろ。

帆立　あんまり腹がすくと、又此処へ来ますよ。彼奴は僕をよく知つているんだから。

総務　たかゞ豚ぢや、気にせんでよろし。

帆立　たかゞ豚だと言つても、生きているのに食物をやらないで放つて置くのは――

総務　ぢや、いつそ、つぶすか。

帆立　ウズ彦をですか？　じょ、じょ、冗談――

総務　あんた、なんであれをそんなに好くかの？

帆立　好く？　いや、僕はウズ彦を信用しているんですよ。彼奴も僕の事を、うまい物を呉れる人間として信用しています。人間としてゞすよ。

総務　アハハハハ。信用か。よかろう。とにかく、では直ぐに後を続ける。えゝな？

帆立　チョ、ちよつと。僕あ先刻から小便が詰つて――

総務　小便！　そりや我慢せないかん。直ぐぢや、もう後二人だけぢやから。

帆立　二人？　ウーン。

総務　（行きかける）では、こんだは、源五郎丸健作、すぐそこの自動車工場の工場主さ、リョーマチが又起つとる。ちやつと一つ二つ気合いを掛けてやれば治る。

帆立　へ？　源五郎丸なら、先刻すんだ。

総務　何を言うやら、寝呆けてはいかん。アハハハ、えゝの？（右手へ去る）

帆立キョロキョロ四辺を見廻す、隅に置いてある靴を発見し、それに近づき、ためつすがめつしながら驚ろいている。次にその持主の姿を求めて廊下に首を出して見たりするが、誰も居ないので、フト思い付いて端の襖をがらりと開ける。そこには男六が平蜘蛛のようになつてすくんでいる。

帆立　だ、誰だ、君あ？　誰だ？

男六　……へ。

帆立　誰だと言つて居るのだ？

男六　ど、ど、どうぞ御かんべんなして！　どうぞ、な、なにも悪気が有つて入つて来たんぢや――ほんのツイ出来心で。――へつ！（バッタの様に頭を下げる）

帆立　だから、誰だと聞いているんだ？　早く言え、下腹が張つてどうもならん。

男六　へ！　実はその源五郎丸――

帆立　なんだと？

男六　の、自動車工場の職――

帆立　なあんだ、それならそうと早く言えばよい。

男六　職工でしたが――

帆立　でした、とは？

男六　首になつちやいまして――あなた様よく御存じで。先刻おつしやつてた――

帆立　あゝ、そうか！　そうか！　そいで？

男六　酒が好きなもんですから、へつへつ……

帆立　ハッキリ言う！　此処をどこだと思う！

男六　へい。わけも無いのに首にしやがつてと、酔うとツイ気が立つて来てムテイ腹が立つて来るもんだから――それに今日は米が無いとか何とかで嬶がわめくんで、そいつを叩きなぐつてると、小僧共あ泣くしさ。そこいヤケ酒だ。カーッとして、こんなことになるのもエ場のオヤヂのせいだと、いきなりスパナー摑んで家を飛び出して、薬鑵頭あ叩き割つてくれようと、無我夢中で行つた――ら、留守だ。

帆立　ふーン。うむ、源五郎丸健作なら、此処に来ている筈だ。もう直き此処に来よう。

男六　そいつあ、いけねえ！　直ぐですか？

帆立　そいで、どうした？

男六　かえして下さい！

帆立　逢いたがつてたんぢや無いのか？

男六　だから、そいつは酒のせいだ。もう、あんた。――かえして下さいよ。

帆立　だから、そいで、どうしたと聞いているんだ。

男六　帰りに此処の横を通つたんです。木戸が開いているんで何の気も無しに覗くと、馬鹿にデカい家でしよう。それにシーンとして人気も無し、ついフラフラッと――

帆立　入つて来たと言うのか？　ぢや、なんだ、君あ泥棒ぢやないか！

男六　何もとつたわけで無え。どうか見逃して――。へい此の通りです。

帆立　声を立てるぞ！　早く帰れ！

男六　は、はい、どうも――帰りますから、ごかんべんなすつて、へい、（コソコソ行きかける）

帆立　そっちへ行くと、廊下で源五郎丸と会う。

男六　オヤヂが？　そいつは、いけねえ！　こいつは――（アワを食つて、その辺をキリキリ舞いする）逃がして下さいよ！

帆立　（それを黙つて見ていたが、急に喜色を浮べて）ウム！　おい、君、此処にチョットの間居てくれんか、僕の代りに。

男六　ぢよ、冗談言つちやいけねえ。

帆立　ほんのチョットだ。小便をして来る間だけだ。先刻から詰つて、顫えが来そうになつているんだ。

男六　冗談言つちやいけねえ。

帆立　これを着て、此方を向いて、知らん顔して坐つていればよい。（白羽織を脱いで男六に着せてしまう）酒が好きだつて言つてたな？　後で御神酒をいくらでも飲ましてやる（男六

を座蒲団に坐らせる）チョットの間だ。いやだと言つたら、怒鳴つて縛らせる！

男六　こ、こまるよ。弱つたなあ！

帆立　黙つて坐つて居ればいゝんだ。

男六　何か言うだろ、先方で？

帆立　言つたら、かまう事ないから、怒鳴りつけてやればそれでよい。まあ、いゝよ。（靴を持つて左の方へ去りかける）

男六　俺の靴を持つてつちや――

帆立　此処に置いとけはしない。

男六　あんた、どつかへ行つちまうんぢや、あるまいね？

帆立　行つちまう？　なあに、……ウム？　そ、そんな事あ無い！　そら来た。（右手から足音。帆立は左手の方へ去る）

男六　よ、弱つたな、どうも、こいつあ！（立つたり座つたり、モヂモヂして弱り切つている）

右手から人の入つて来る気配。男六は、もうどうにも仕方がなく、座蒲団に祭壇の方を向いて坐つてブルブル顫えている。

右手から入つて来る和服の中年の男七。ピタッと坐つて礼をするが、腰の辺がひどく痛むらしい様子。

男六　ギャツー！　（古代鏡の中に以前の雇主の顔を認めたのである）

男七　左様でございます。源五郎丸健作でございます、はい。此の前、お祈りをしていたゞいてズーッと良かつたのでございますが、又、少し、なんです――（相手が何も言つてくれないので、仕方なく言葉をつぐ）或る医者に言わすと坐骨神経痛の気味も有ると言いますがな。なんでもよいから治つてくれさえすればよろしいが、どうにも痛みますんで――（待つているが、相手は何も言つてくれぬ）……はい。此の前の御伺いの際は、後で総務様からの、おトキアカシで、ようく解りましたでな、材料の仕入れ先を変えて見ましたが、なにしろ近頃儲かりはしますが、業界もきゆうくつになつてしまいまして、変えると言つても思うように行きません。第一この自動車の部分品と言うやつが――

男六　ギャツ！　ウーム、ウウウ。（もうヤケクソになり、帆立から自分の言われた事の口真似）び、び病気が又起つた！　ま、ま、まあ坐れ！

男七　へつ！　はい坐つて居ります。はい！

男六　慾が有る！　慾が内にこもつて、そいで、リョー、リョー、リョーマチになる！　用心しろよ！　慾を捨てろ！　持つてゐるものを捨てろ！　儲かり過ぎる！　それだつ！　それだつ！

男七　へーつ！　（畏怖にとりつかれて、平蜘蛛のように畳にひれ伏している）

男六、ソーツと肩越しに男七の方を見る。自分の言葉の効果の甚大なのに呆れている。

男六　（次第に自信が出て来て）用心しろよ！　臨時工を、こないだ、訳も無しに首にした。これがいかん。

男七　いゝえ、それは、採算上、どうしても――

男六　それが、いかん！　見通しだ！　みんな慾だ！　みんな捨てろっ！

男七　は、はい！　では、もう一応よく考えて見ることに――

男六　（舌をペロッと出して）帰れつ！　帰れ！

男七　その、リューマチの――

男六　それは、メカケを一人、へらせつ！　本妻のほかにメカケを二人とは、多過ぎるぞつ！

男七　へーつ！

男六　やつ！　え、やつ！　よし、そのまゝ！　そのまゝにしておる！　おゝつ！　そのまま！

段々いゝ気持になり、それでも相手が顔を上げはしまいかとビクビクしながら、立上つて行き、持つてゐたスパナーで、男七の腰をイヤと言うほど、ひつぱたく）えやつ！

男七　ヒーッ！（それでも畳につ伏している）

男六　（驚ろいて座蒲団の方へ逃げ帰つて）もうよい！　帰る！　帰った！

男七　はい。では――どうもありがとう存じました。はい。（立上り腰を揺つて見て、狂気して）あ、あ！　痛みが取れた様な気がいたします！　ありがとうございます。ありがとう存じます！（又、もう四つ五つお辞儀をして、嬉しさのあまりヒョロヒョロしながら右手へ小走りに去つて行く）

男六　フーッ！（呆然としている。自分で頭をグラグラゆすつて見ている。スパナーを見る。自分の舌を引つぱり出して鏡に映して見る。ゲラゲラ笑い出す。自分の笑声に驚ろいて四辺をキョロキョロ見廻す）

右手から入つて来る女二。五十歳位だが着物も化粧もひどく贅沢で若造りのために、チョット年齢がわからない。変にお上品で色つぽい。身体の方々が痛むと見えて、顔をしかめ歯を食いしばり、身体を折つて横腹を左手でおさえ、右手では胸をおさえている。ペタリと坐つて。少し唸る。

男六　だ、誰だ？

女二　せんだつては、ありがとう存じました。若島の母親でございます。あの――

男六　ワカシマ？

女二　はい。加藤博士のおつしやいますには、それは神経病だから、薬を飲んでも治りはしない。佐田博士も、あなたがその気にならなければ――

男六　そ、そ、それがいかん！

女二　は、はい。

男六　右も左も眞暗闇だつ！

女二　そうなのでございます！　いくら気のせいだと言われましても、痛みますものは痛むんざいますから。お薬だけでも七色飲むのでございませう、あの薬とこの薬と、どれがどの病気に利くのか、身体の中で戸惑いをするのではないかと心配でございます。そうすると又頭痛が起きて来るのでございます。第一、それだけのお薬をみんな飲んでしまいますと、もうお腹が一杯になつて、御飯がいたゞけないのでございます、はい。

男六　……たかゞ豚だと言つても、生きているのに食物をやらないで放つて置くのは――

女二　はい。先生がたも、物を食べないのは毒だ毒だとおつしやつて下さるのですけれど、なにしろ、病気なれば致し方がございませんので――

男六　いつそ、ひと思いに、つぶすか！

女二　はい。どうぞ、そうお願いいたします。今、具合の悪いのは、この左の腕の神経痛と、胆石に差し込みが来ています。もう痛くて、痛くて、はい。それに心臓が苦しくつて。佐田

博士は神経性の心悸昂進だから放つといてもよいとおつしやいますけど、私は狭心症ではないかと存じます。それに左の足の釣るのが今朝程から急にひどくなつて参りまして、それから四五日前から、少し舌がもつれる様な気味で口を利くにも不自由いたします。いくらか中風の気が出て来たのではないかと存じますが、いかゞでございましよう？

男六　えゝ、頭痛などは始終の事で、病気の中には入れて居りません。それから――

女二　ウーン……頭痛か？

男六　はい、此の、此処の所から、此方へかけて――

女二　ウ、ウ、ウ――ギャツ！

男六　はいつ！（ひれ伏す。やがて少し頭を持ち上げて。右手で額や頭を圧へて見ている）あ！

女二　癒りました！　癒りました！　今までピンピンしていたのがピタッと癒りましてございます。頭がスーッと軽くなつて参りました。はい！　ありがとう存じます！

男六　捨てろ！　捨てろ、捨てろ！　えつ！　おゝつ！　えやつ！

女二　へーつ！　……あゝ、心臓の苦しいのが取れました。舌が急に自由になつたようでございます。（本当に次々と癒つて行く。狂気渇仰する）次は腕の此の神経痛を、どうぞ、はい！

男六　つぶすぞつ！つぶすぞつ！　豚つ！　ウウウッ！　みんな慾だつ！　見通しだつ！　えいつ！

女二　あゝ腕が伸ばされるようになりました！（左腕を振り廻している）

男六　たかゞ豚だ！　スのコンニャクと言うかつ！

女二　胆石の差し込みが取れました！　まあ、何と言う！　ありがとう存じまする。奇蹟でございます。あなた様は神様でございます！

男六　（だんだん怖くなつて来て）もうよい、帰れ！　帰れ！　帰れつ！

女二　はい、はい、はい！　ではもう一つ、足の釣るのを、どうぞ、はい！　お願いでございます。お願いでございます。

男六　ギャーツ！（自分でも訳が解らなくなつて、そこにある剣を引つこ抜いて、いきなり振り廻す）帰れーいつ！

女二　へーつ！（叫んで飛びさがる。そしてヒョイと気が付くと、左の足の痛みが無くなつている。狂喜してその辺を四五歩踊るようにして見て）あゝーあ！　癒りました。癒りました！　おあらたかなものでございます！　皆様に申し上げなければなりません。あなた様は神様でござり――

相手が抜身を振り廻していて危いので、しまいまで言い終らず、廊下の方へ飛び出し、そこで身を伏せて、合掌を一つしてから立上り、アタフタと右手へ去る。

あとには男六、まだ剣を振りまわしているが、女二が居なくなつたのに気付き、振りまわ

すのをやめる。

男六　ウーン。（トタンに眼をまわして、ひつくり返る）

間――馬鹿囃し。

テケ、テケ、ピッピーと囃しの終りの所で男六ソロソロ起き上る。頭を振る、その辺をキョロキョロ見廻す。

ズーッと右手の奥で多数の人々のざわめく声々。それが次第に近くなつて来る

ビックリして飛び上る男六。こうして居たらどんな目に会うかわからない事に気が付いて逃げ口を捜してウロウロする。白羽織をかなぐり捨てる。奥正面の襖をソッと開けて、うかゞつて見る。人が居そうにないので、慎重な抜き足差し足で奥へ消える。あとの襖は半開きにしたまゝ。

入れ違いに、右手入口からドヤドヤと押合うようにして殺到する信者達――今迄此の場に現われた者全部と、更に新しい顔も多数混つている。総務や執行や執事の白衣姿も勿論混つている。若島母堂から奇蹟を現に見せられて、皆が昂奮しきつて、帆立に向つて渇仰の念を捧げるために揃つて押し寄せたのである。互に熱狂的な眼付きをして囁き合い、感嘆し合いながら入つて来る。

総務　みなさん、お静かに！　お静かに！

女二　（男三をつかまえて）おかみが、ヤッとおつしやるんざいます！　すると、一つ一つ私の苦しみが、まるで舐めて取つたように消えて行くんざいます！

男三　ふ！　奇蹟でがんすなあ！

男七　全くですよ！

男五　あゝ、いらつしやらん！（皆が祭壇の方を見る）

総務　あゝ！　……いや、接神の方へおいでになつたのです。直ぐお戻りになりましよう。開いている襖を指す）皆さんお坐り。（自分が先ず坐る。皆もそれにならつて坐る）直ぐにお戻りになります。

女二　（女一に）私があんなに苦しんでいたのは、あなたも御存じざいましたね？　おかみがヤァとおつしやいます、とそれが一つ一つ、まるで舐めたように――

総務　静かに！　おでましでござります。

（皆がシーンと靜まる。襖の向う側でドシドシ足音がする。次に襖が向う側からゴトゴト鳴る）

おでまし！（まつ先に畳にひれ伏す。皆もそれにならつて畏怖に満ちて畳に額をすり付ける。水をうつたように靜かになる）

――間――

正面の開いた襖の間から、びつくりする位に肥え太つて桃色をした豚のウズ彦が、悠然として現われる。堂々と前の方へ歩いて来る。――それに向つて、ひれ伏している一同。

ウズ彦　ブウ、ブウ！

総務　シーッ！（自分でもひれ伏したまゝ、皆の頭の上へ左手を上げて、押える）

ウズ彦　（人間を無視して、その辺を歩き）ブウ、ブウ！

総務　シーッ！

ウズ彦、自分の捜している人間が居ないので、悠々と、先程帆立の去つた左手へ向つて去りかける。

幕。――馬鹿囃子。

幕外、花道へ、抜き足で、出て来る帆立。羽織こそ着ていないが、白衣白袴に、片手に靴を

下げている。

帆立　（七三の所で止り、振返つて）此処まで逃げて来りやこつちのもんだ！　（又駆け出そうとして、気が付いて自分の素足を見、それから手の靴を見て、うなづいて、靴を穿きにかゝる）

幕の傍からウズ彦の鼻が覗き、次に花道に出て来るウズ彦、帆立を見つけて喜んでブウブウと言う。

帆立　（靴を穿き終る。非常に異な姿である。しかし勇気リンリンと）おつと、どつこい！

ウズ彦　ブウ、ブウ！

馬鹿囃子と、鳴物と、ツケに乗つて、ドタ靴を高く鳴らし、帆立とウズ彦は、器量一杯に逃げの六法を踏んで揚場へ。

（作者附記）――

専門劇団の手で堂々と演じられるのと同時に、素人劇団の手でどんなに手軽に演じられて

も面白いように心がけて書いたものなので、いろいろの集会の余興として演じて貰いたいと思います。やり方は自由だが、マヂメくさつて演じることが大切です。フザケてやると、あまり効果がありません。

底本　脚本シリーズ　第５集
著者　文部省青少年演劇研究会　編
出版者　教育弘報社
出版年月日　１９５３